

疎開の思い出

水野早知子さん 梅坪町在住 昭和11年生まれ
1945年、京都市立東和小学校4年生の3月から9月まで
京都府須和町宝生寺へ学童疎開



もう70年前のことで、記憶がはっきりしないのですが、食べ物のことが思い出されます。それだけ、ひもじかったのだと思います。

時々、親たちが面会に来て自分たちもなけなしの食べ物を子ども達のために持ってきました。ある時、炒り大豆を10粒ほど配られました。それを大事に食べました。その時、私は「サッチャンは一粒の豆を30回もかんだよ。」と言いました。それを何故かはっきりと覚えていていろいろ考えさせられます。

ビオフェルミンやエビオスをお腹が痛い時にのむように親から送ってもらっていたのを、お菓子代わりに一粒ずつ食べました。6年生の男の子が「僕は魔法の粉を持っている。これを舐めると誰でもたちまちにこにこする。」と言いました。それは砂糖でみんな羨ましくて彼の後をぞろぞろついてまわりました。

私はよく下痢をしました。食べ物もきつと消化の悪いものだったからだと思います。

8月15日は真っ青な空で暑い日でした。セミがジージーと鳴いていました。大人達はガーガーと聞きにくいラジオを聞いて泣いていましたが、自分にはわけがわかりませんでした。

10月になって遠足から帰るように並んで学校に帰ってきました。6年生の兄が大勢の中、大声で「サチコが帰って来よった！！」「サチコが帰って来よった！！」と言っていました。嬉しいよりも恥ずかしさがいっぱいでした。6年生の兄はいっしょに疎開をしたのですが、栄養失調のためトリ目になり途中で帰宅していました。子どもなりに喜んでくれたのだと今は懐かしく思い出します。

私は小学校低学年の頃（戦争中）学校でよく叱られ立たされてばかりでした。親も自分も直すすべもなく悲しい毎日でした。ところが戦争が終わった5年生からは自分を主張できる子として、先生からも友達からも認められ楽しい毎日となりました。これが自由というものかと子どもながらに戦争が終わったことを心の底から喜びました。

戦後70年の今思うこと

子どもが疎開をするって大変なことだったと思います。親達、子ども達、先生達、受け入れてくださった人々。今、親の立場で考えるだけでも胸が痛くなります。それと似たことが原発事故。たくさんの人々が避難をしています。周辺で今もあると思えば、悲しい。私たちの疎開は戦争が終われば自宅に帰れたが、原発には終わりが見えないから一層悲しい。じっとしておれない思いがします。私達の平和な暮らしを守るために戦争や原発をなくするために、行動しなければと思っています。（2015年4月 記）